

7年間のお小言

雇用開発研究部第2研究室 中村圭介

私が大学院に入学した時、氏原先生は定年退職の1年前だった。それ以来7年間、大学院の学生として、職研の非常勤助手、そして研究員として、先生から実にたくさんの研究上の助言、お叱りをいただいた。私はかなり出来の悪い生徒であったのだろう、小言を言われ続けてきた。時には、叱られている理由がわからないこともあったが、今、思い起こせば、「他山の石」とすべしとの深慮遠謀があったにちがいない。この小文では、それをほんのわずか紹介しようと思う。それは一つには、助言やお叱りは広範囲にわたっており、そのいくつかは他の研究者にも参考になるであろうと思うからであり、二つには私自身の備忘録のためである。

「君の書いた文章はわかるね」。最初の書評の原稿を先生にみていただいた時の、数少ないお誉めの言葉の一つである。普通の言葉で、わかりやすく書くこと、これが第一歩であった。

「一体何を主張しようとしているのか」。私の処女作の大部な原稿を読んでいただいた時のコメントである。夜6時頃から、2時間以上にもわたって、問題設定、仮説、課題の限定など論文の書き方のイロハを教えられた。

実態調査法を使った社会科学的研究を先生から教えてもらおうとしていた私は、理論面そして調査方法面の両面について、先生からお叱りを受けた。

「君には全体理論というものがないんだ」。研究の対象が、日本経済社会の中でどのような位置をしめているのかを理解しないままに、それを分析したとしても、それは社会問題解決のための指針たりえないということだと思う。

そしてまた自分の研究が全体理論あるいは部分理論にどのような貢献をなしうるかを、全く考慮しない研究態度をとっていたことに対して、先生は非常にお怒りになられた。

「調査ばかりして報告書を書きっぱなしで、理論化をしないから、馬鹿にされるんだ」。だから「邦語、外国語、報告書、本や論文、とにかくいいものを読まないで、本当に調査屋になるぞ」とも言われた。ここで調査屋とは理論を忘れた、単なる事実の収集屋というような意味だと私は思う。他方、調査方法についてもいろんなことを言われた。

「実践家は、言葉を定義しないで使っているし、それが普通なのだ。だからといって調査する方が、それをそのまま受け入れていいことはない」。「われわれは実践家の行動を整理し、その背景を探るのが使命なのだから、言われたことを無批判に整理すればいいというものじゃない」。

そのためにこそ仮説そして理論が必要で、冷静な観察眼が不可欠なのだと言われ、先生は私に繰り返し教えられた。また、次のことも強調された。

「いいか、調査はスパイじゃないんだ。基本的な人権を踏みこむことは絶対許されない」。

ところで、私の研究活動も徐々に国際化しているが、先生は「君たちみたいな若い世代が、自分達が調査の中で学んだ研究方法、理論を使って、国際比較をすればいいんだ」とよく励ましてくださった。私は86年の秋、西独で共同研究をする機会を与えられたが、渡欧する前まで別の仕事を抱えていた。先生はその仕事に追われて、準備をなかなかしない私をみるにみかねたのであろう。「そんな仕事ちょっとくらい遅れたって構やしない。君にとっては今度の機会は非常に大切なんだ。僕がなんとかしてやるから、やめてしまえ」と言われた。先生が私のかわりに、原稿の遅いことを謝っておられたというのを私は帰国後に、友人から聞かされた。私にとっては、厳しくそして優しい先生であった。